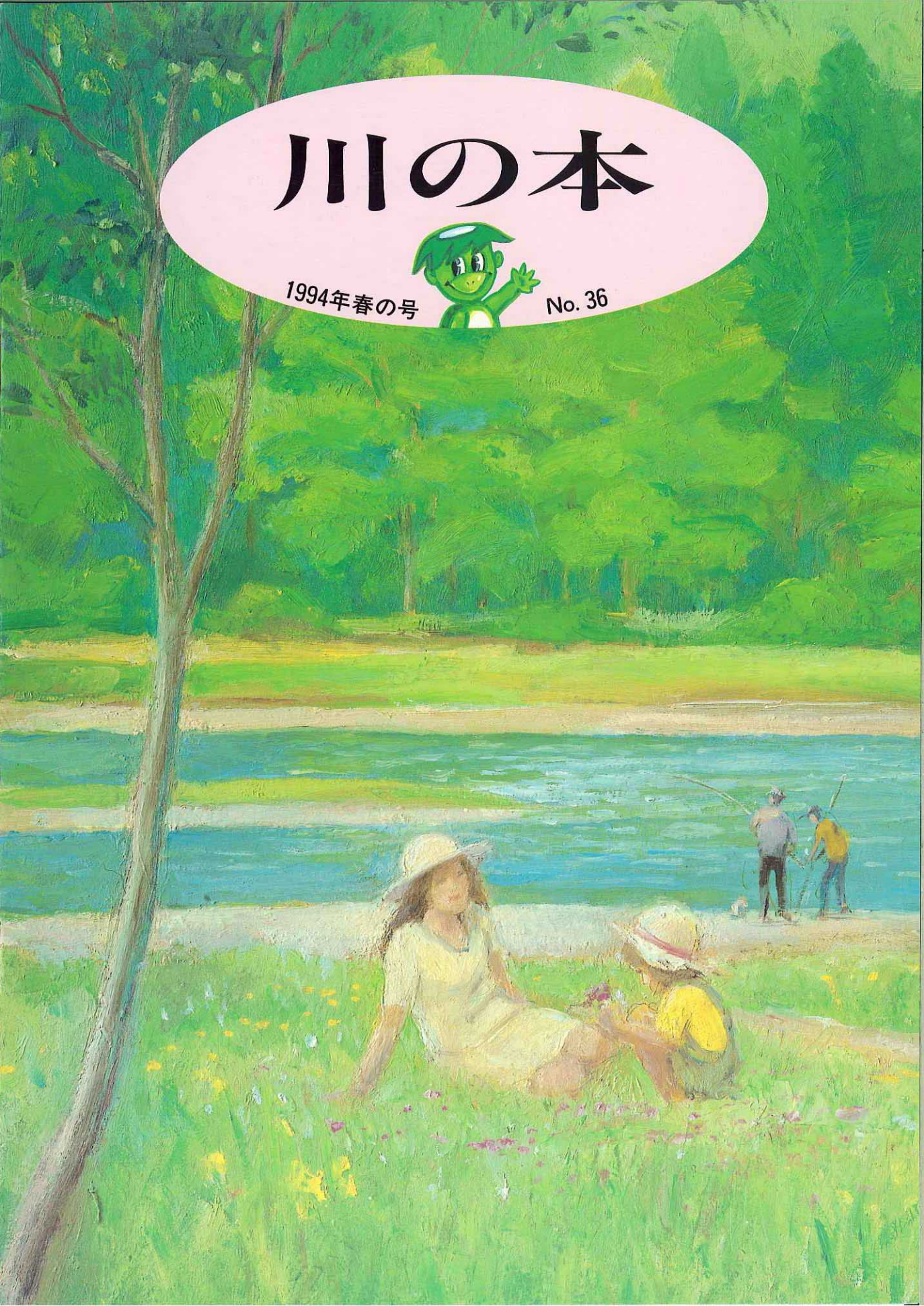
川の本

1994年春の号　No. 36



王瀬の長者

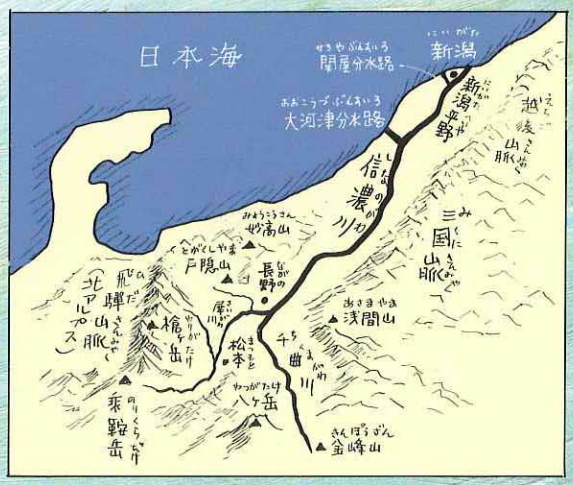
むかし、沼垂の王瀬（いまの新潟市）といわれたあたりに、たいそう金持の長者がすんでおった。
そこは、信濃川が海にそそぐあたりで、そのまわりには田んぼがひろびろとつづいておって、そこの百姓や漁師はみんな長者につかわれておったと。
秋がきて、信濃川をサケがのぼりはじめると、長者は漁師をさしずしてサケをとらせる。日に百ぴきもの、りっぱなサケがとれたそうな。それを高い値で売ったので長者はもうけるばかり、まい日がほくほく顔だったと。
ところが、一年に一度だけ、長者のきげんがわるくなる日があった。
それは、11月15日のことで、この日だけは、漁師たちがしごとをやすんでしまうからだった。
そのわけは、毎年この日には、大介、小介と名のるサケの夫婦が、サケの大群をしたがえて「大介、小介いまのぼる……」とさけびながら、信濃川をさかのぼり、信州（いまの長野県）の戸隠山へおまいりにいくとつたえられておったからだ。
大介、小介は3メートルあまりもある大きなサケで、銀色のうろこをきらめかしながらおよぐすがたは、それは、それは、みごとなものだったそうな。漁師たちはそのありさまをうやまって、この日ばかりはしごとを やすみ、けっして川へ網をいれなかったのだと。
さて、長者にとっては、これが、なんともしゃくにさわる。月日がたつにつれ、しだいにがまんがならなくなり、長者はある日、漁師たちをあつめてこういったと。
「ことしの11月15日はしごとをやすんではなんね。網をいれて大介、小介をつかまえてしまえ」。
漁師たちはたまげてしまった。
「そげんことすりゃ、たたりがおっかなすけ（こわいから）」「そればっかりは、ゆるしてくらっしえ」
とくちぐちにたのんだども、長者は
「わしのいうこと聞かれんやつは、この土地にはおかんすけ、どこえでもいげや」と、どなりつけたんだと。
その夜のこと、すっかりねむりこんだ長者のみみもとで、「長者どの、長者どの」とよぶ声がしたんだと。
はっとしておきあがった長者のまくらもとに、二ひきの大きなサケがならんでおって、
「わたしたちをつかまえるなんて、おねがいだからやめてください」とたのむんだと。朝になるまで3度もたのみにきたが、長者は、そのねがいをはねつけたそうな。
そして、とうとう11月15日がやってきた。
長者は、朝からはりきって、
「サケの大介、小介が何ぞい、たかがサケじゃ、はよう網うてい、網うてい」とめいれいした。
長者にさからえない漁師たちは、しかたなく網をうちはじめた。ところが、なんど網をうってもいっぴきのサケもかからない。長者は声をからして「もっとしっかり網うてい、しっかりうてい」とわめいたが、この日にかぎってどうしたわけか、小魚いっぴきかからなかったと。
漁師たちも、くたくたになって、「なんぼ網うってもだめでがんす。たたりがおこらんうちに家にかえらしてけろ」とにげるように帰ってしまったそうな。
もう、すっかり日がくれて、あたりはくらくなっておった。長者は、家にかえっても、くやしくてねむれない。
一人で真夜中まで酒をがぶがぶのみ、たおれるようにねどこにはいったと。
それからどれくらいたったか、ぞくぞくするさむさで長

者が目をあけたら、かがやくような銀色のかみの毛をなびかせた、じいさまと、ばあさまが、こわい目をしてにらんでおったと。
「な、なんだ、おめえたちは…」
長者が、ふるえごえでそういうと、
「きょうは、なんともごくろうじゃったのう、わたしたちのたのみもきかず、網をうつとはなさけない」
といいのこして、ふたりのすがたは、すうっと消えてしまったそうな。そして、しばらくすると川のほうで、ばしゃっ、と水にとびこむ音がしたと。
「ああっ、あれは、大介、小介……」とおもったが、長者は声をだそうにも、なぜか声がでず、しだいに気がとおくなって、くらい穴にすいこまれるようだったと。
と、そのときだった。
信濃川では「大介、小介いまのぼる……」とさけぶ声が鳴りひびいて、川面がふくれあがるほどのサケの大群が、月のひかりにかがやきながら、ぞくぞくと川をのぼっていったそうな。
それからというもの、長者の家には不幸がつづき、稲はみのらず、魚もとれない、とうとう長者も病気になってくるしみつづけて死んだそうな。

このお話の舞台、信濃川。

この長者話は、新潟県にのこる民話です。
信濃川と、そこでくらしをたてていた人びとのお話です。
大介、小介のような3メートルもある大鮭なんて、いるわけはありませんが、産卵のため川をさかのぼる鮭は、むやみにとらないという漁師たちの知恵や、そんな自然のいとなみを馬鹿にしてバチがあたる長者など、川や自然を大切にしていた人びとのすがたを感じとることができますね。

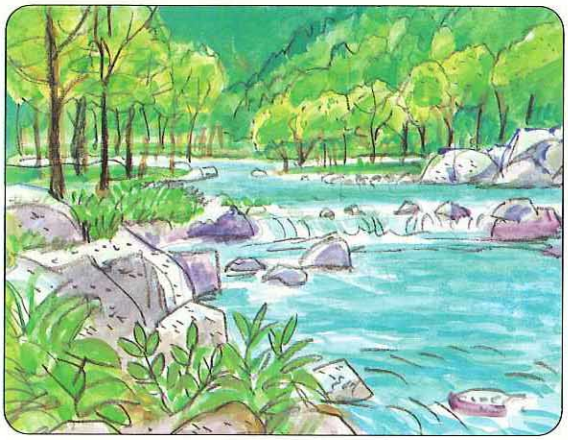
さて、お話にでてくる信濃川は、本川の長さ367km、日本一長い川です。水の豊富さでも日本一です。
ちょっと、地図をみてください。
この川は、北アルプスや八が岳など冬には雪につつまれる高い山山から流れだしていますね。また、長野も越後の山山も豪雪地帯です。雪は暖かくなってとけだすまで、大地にしっかりとどまって、天然のダムの役目をしてくれます。
つまり信濃川は、日本一大きなダムをもっているといえますね。信濃川の水が豊富な理由はここにあるのです。
しかし、水の量が多い川ということは、洪水をおこしやすい川でもあったわけです。長い年月の間に信濃川がおこした洪水によって運ばれてきた土砂が、つもりつもってできたのが新潟平野です。ところで、お話の舞台の新潟市あたりは、江戸時代はまだ海だったそうです。そうだとすると、このお話はいつごろつくられたのでしょうね。
また、この大介、小介の伝説は、山形県にもあって、同じく11月15日には鮭漁は休むといういい伝えがあるそうですよ。



参考にさせていただいた本
「新潟県の民話」日本児童文学者協会編　偕成社　平成2年発行
「日本のこわい話」永田義直編著　金園社　平成4年発行

川辺の植物ウオッチング

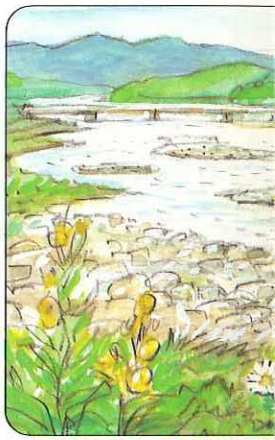
春の川原にきてごらん。タンポポが咲き、つくしんぼうも芽をだしている。みなれた草花でも名前のしらないものがいっぱいある。そのほんの一部をしょうかいしよう。君はどれだけ知っているかな。さあ、川原へいって野草ウオッチングをしよう。



ヒメレンゲ［ベンケイソウ科］
上流の沢ぞい、しめった岩の上にはえる
本州、四国、九州／花４～６月

ユリワサビ［アブラナ科］
上流の渓流などきれいな水辺に多い
日本各地／花４月

キクザキイチゲ［キンポウゲ科］
雪国の上流の湿地に多い
北海道、近畿地方以北／花４～６月



マメグンバイナズナ［アブラナ科］
中流の川原に多い
日本各地／花５、６月

ネコヤナギ［ヤナギ科］
中流の川ぞいに咲く
日本各地／花３月

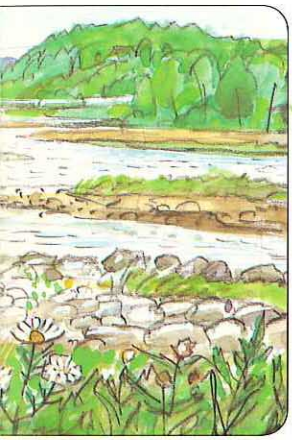
カワラサイコ［バラ科］
中流のかわいた川原などに咲く
日本各地／花６、８月

カワラハハコ［キク科］
中流の川原に多い。ドライフラワーにできる
日本各地／花６、８月

ヒキノカサ［キンポウゲ科］
下流に多い。太い根に養分をたくわえる
日本各地／花４、５月

ミゾソバ［タデ科］
下流のどろ地など水辺に群生する
日本各地／花８、10月

ダイモンジソウ［ユキノシタ科］
上流の湿地に多い
日本各地／花7、10月

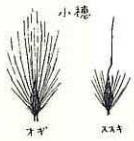


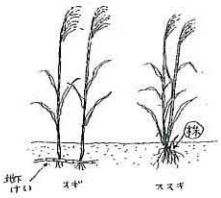
アズマイチゲ［キンポウゲ科］
上流の小川などの湿地に多い
本州、四国、北海道／花3、5月

クリンソウ［サクラソウ科］
山地の湿地、上流の流れのほとりに多い
日本各地／花6、7月

カワラニガナ［キク科］
中流の石がゴロゴロした川原などに多い
日本各地／花6、8月

サクラソウ［サクラソウ科］
下流の栄養の多いしめった土地をこのむ
北海道、本州、九州／花4、5月



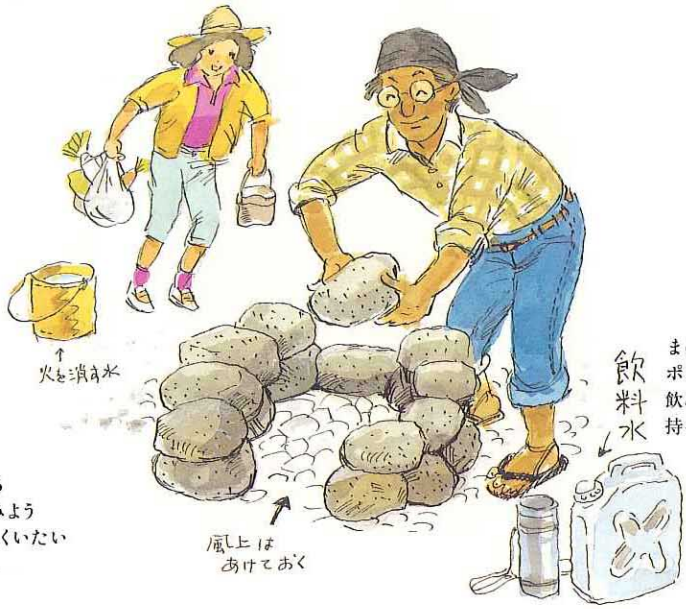


オギ［イネ科］
下流の水辺を好んで群生する
ススキににているのでまちがいやすい
日本各地／花10月

アウトドアライフの第一歩

川っぱらがよんでいるぞ

火の用心やあとかたずけにも
気をくばるお母さん。

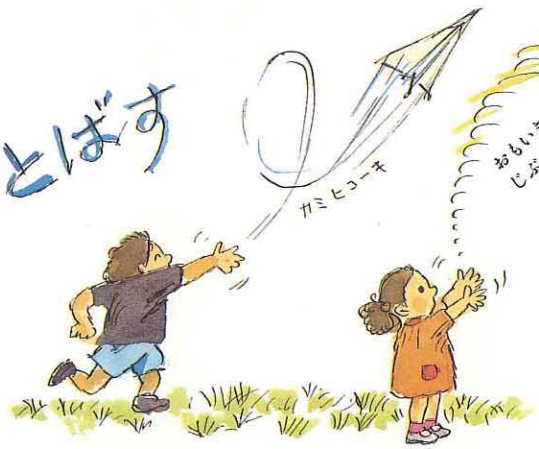


はんごう炊飯

たきぎをあつめる
はだしになってみよう
足のうらがちくちくいたい
でもがまんしろ。

消毒液やバンドエイドは
もっていこう

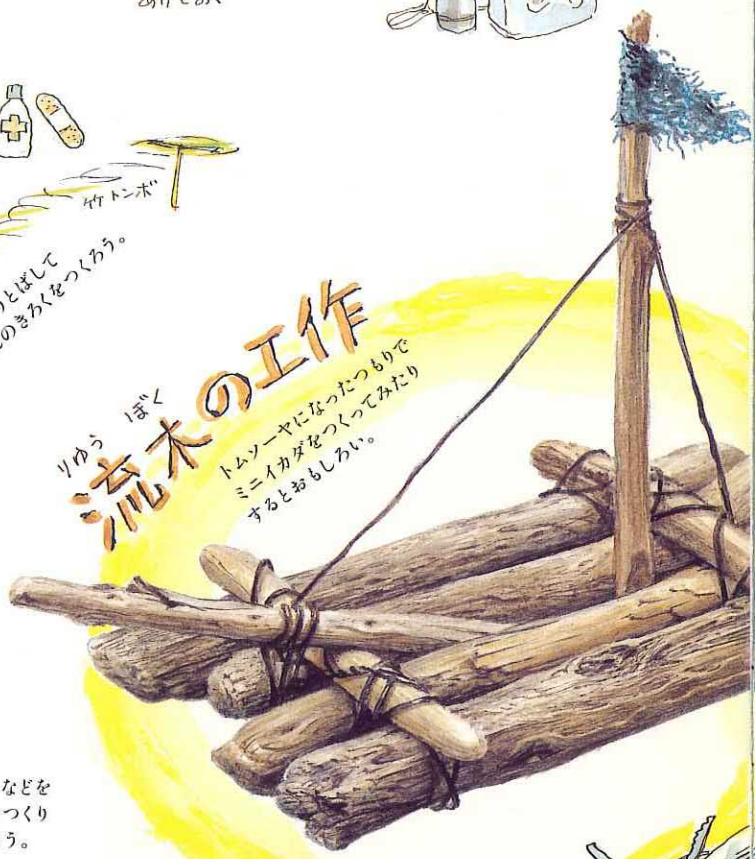
とばす



おもいきりとばして
じぶんのきろくをつくろう。

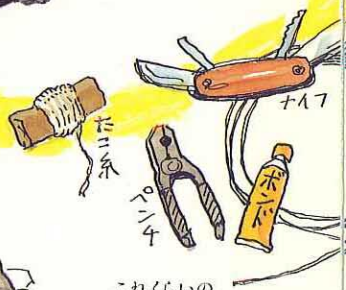
流木の工作

トムソーヤになったつもりで
ミニイカダをつくってみたり
するとおもしろい。



かいじゅうのしゃしんをとる

かいじゅうのおもちゃなどを
くみあわせたセットをつくり
しゃしんをとってみよう。

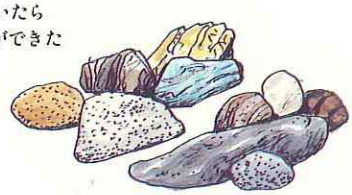


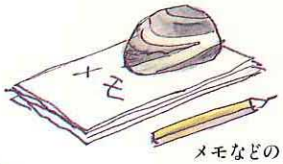
これくらいの
道具は用意していく

ストーンハンティング
石さがし

小石に
目鼻をかいたら
ゾウさんができた

きれいなもようの石
をさがそう、もしか
したら、宝石がみつ
かるかもしれないぞ。





メモなどの
重しにして
もいいよ。

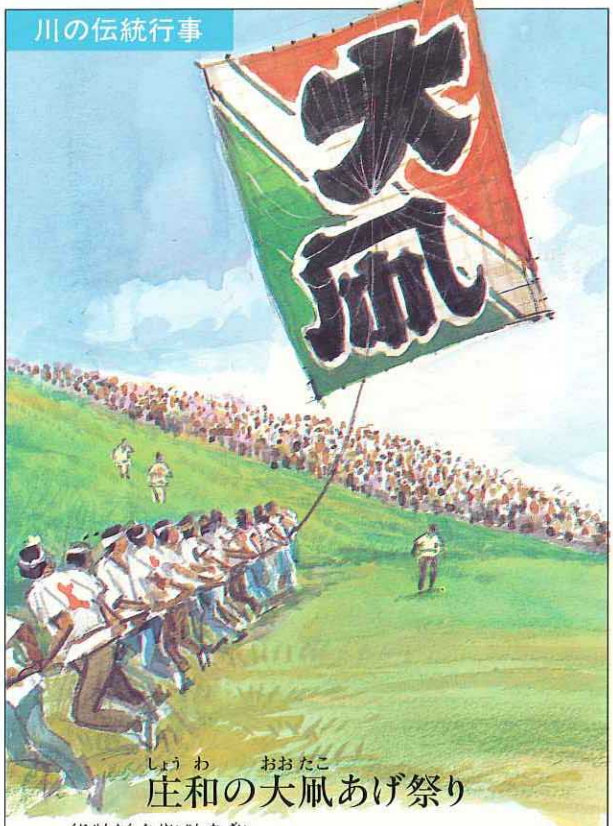
きれいな色の小石を
アキビンにいれて
花びんにする。

水の流れのはやさは、木ぎれ
などをなげいれてみるとわかるが
足をつけてみると
見た目いじょうに流れの力は
つよいから、気をつけよう。

なるべくさびた はりがね
この方が感じがでる

水の中はガラスのかけらなど
きけんなものがあるので
きをつけよう。

川の伝統行事



庄和の大凧あげ祭り

国選択無形文化財になっているこの庄和の大凧は、縦15m、横11m、重さ800kgもある日本一の大凧です。行事の歴史も古く、江戸時代後期に河川交通の要所として栄えていた宝珠花を訪れた一人の僧侶が伝えたといわれています。

大凧が、その年、初節句をむかえる子供たちの名前を書いた紙をむすびつけ大空高くまいあがる姿は勇壮です。多くの観光客をあつめるこの行事は、毎年5月3日・5日、埼玉県北葛飾郡庄和町大字西宝珠花、地先の江戸川堤でおこなわれています。

川へ行くときの注意

でかけるときは、行先を家のひとにつげておく。なるべく、おとなの人と行く。
ともだちどうしで行くときは、3人いじょうさそいあわせる。
川の流れをよくかんさつして、深そうなところや流れのはげしいところなど危険なところがわかったら、ともだちにおしえてあげよう。
雨のあとなど、川が増水しているときは行かない。
危険をしめす掲示板などがあるところはさける。
あきかんやごみをすてないように。
もっていったものはかならず、もちかえろう。

川のマメ知識

一級河川と二級河川は、どうちがうのでしょう。

河川は、河川法という法律によって管理されています。
川は何本かの川があつまって一つのおおきな流れになっていますが、この一つにあつまる何本かの川全体をまとめて水系といいます。
国や国民にとって重要な水系は、一級水系としておもに国が、それ以外は二級水系としておもに都道府県が管理しています。そして
一級水系に含まれる川が一級河川
二級水系に含まれる川が二級河川
となっています。見た目には小さな川でも、一級水系に含まれる川は一級河川です。

河川環境管理財団は
みんなに愛される川であるように、こんな仕事をしています。

＊よりよい水辺のプランニング
＊楽しく安全に遊べる川づくり
＊川をきれいに、川を愛する心を育ぐくむ運動
＊未来の水辺を考えた調査や研究
＊せせらぎ・ふれあい基金

●この本は再生紙を使用しています。

監修　建設省河川局
財団法人 河川環境管理財団
Foundation of River & Watershed Environment Management
(〒104) 東京都中央区入船1丁目9番12号
TEL. (03) 3297-2600 (代表)